
その手を愛す

志内炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その手を愛す

【Nコード】

N7466C

【作者名】

志内炎

【あらすじ】

手のお手入れに執着する彼女、いつも長袖を着ている病院の事務員……手にまつわる短編五話を掲載。

美しい手（前書き）

この小説は完全なフィクションです

美しい手

僕の彼女は手フエチである。

まず第一に自分の手を愛している。

顔に塗りたくる化粧品をあますところなく、手にも塗りたくっている。爪の手入れは怠りなく、

「今日、サロンで甘皮取ってもらったんだ」

と嬉しそうに見せる爪は綺麗に揃い、見事なピンク色で、マニキュアもしてないのにつるつると光っている。

が、ネイルサロンとは、こてこてと飾りつけするところではないのか。

「それでいくらくらいなの？」

「んん？二千円くらい」

高っ。たまにどうしても食べたくなる、とんかつより高い。とんかつは、ご飯も味噌汁もキャベツもお代わり自由だぞ。

女心はわからない。

まあ、彼女は彼女の稼いだ金でやってるんだし、普段豪快な分、そういう繊細さはかわいいな、と思わなくもない。

だが何故、手なのだろう。顔でも脚でも胸でもなく。手なんてあんまり見ないぞ。

ある休日。

久しぶりのデートで、飯を食った後、ふらりとスナックに入った。暗い店内でカウンターに並んで座る。

「どういふご関係なんですか？」

なんて事から始まって、

「お似合いですね」とか、

「ラブラブですね」とか、ちょっと面映ゆいけど満更じゃない言葉がならぶ。

「で、彼女さんは彼氏さんの何処が一番好きですか？」

「んん……」

彼女の真ん丸い、アルコールで少し潤んだ目が僕を見つめる。

どんな事を言ってくれるんだろ。何を褒めてくれるんだろ……

「手かな」

「手ですか？」

カウンターの中の女の子が素っ頓狂な声をあげる。

「うん、この手が好き」

そう言っ僕の手をカウンターの手に持ち上げる。

女の子は言葉に詰まっている。

そりゃそうだろう。

特に指が長いわけでもなく、特に美しい形をしているわけでもない。指と手の甲の小指側には黒々と毛が生えている。若い頃につけたやけどの後や仕事で出来る豆、傷なんかで決して綺麗ではない。

「色々詰まってるんだ」

「はあ……っっていうか彼女さん、すっごく綺麗な手、してますね」
彼女の意味不明な発言に、女の子は話題をすり替えてしまった。
ふと目が覚めると見慣れない部屋だった。シャワーの音がする。

枕元では照明やBGMの電源パネルが薄く光りを放っている。

そうだ、スナックを出て彼女とお泊りしてるんだった。

僕はうつすらと目を開けて自分の左手を見た。

手の甲には二カ所の根性焼き。中学生の時にやった。でも熱くて上手く出来ず、小指の爪位のツルツルした皮膚が出来上がっているだけだ。

ひっくり返して掌を見る。ひらがなの『て』とカタカナの『テ』を裏返して組み合わせたような皺。びっくりするような幸運が刻まれているとはとても思えない単純な手相。手首には縦に伸びる二センチ位の古い切り傷……

「何これ」

初めて彼女がこの傷に気付いた時、まるでいやらしい雑誌を見つ

けた理解ある母のように言った。

「……昔虐められっ子だったって言っただろ？」

「その時？縦に切ったら死んじゃうよ？」

「だから縦に切ったんじゃない。でも血が凄く出ただけだった」

彼女は手首をとってよく眺めた。

「本当だ。血管からずれてるね」

「だから今でも生きてる」

「ばっかじゃないの、虐められたくらいで逃げ出すなんて」

彼女は豪快に笑い飛ばした。それから優しい顔をして、

「でもよかった、逃げ切れてくれなくて。だから会えたんだもんね」

と傷を撫でながら言った。

シャワーの音が止まると、バスルームからは出鱈目な鼻歌が聞こえた。僕は笑いながら、再び眠りにおちた。

再び目覚めた時は、コーヒーの香の中で、右手がマッサージされていた。

「目、覚めた？」

「うん……」

「なんか寝言で笑ってたよ」

「お前が風呂で変な歌、歌ってたから」

彼女が裸で出鱈目ソングを歌いながら踊り狂っている夢を見た。

「え、聞いてたんだ」

そういいながら、今度は反対の手をマッサージし始める。

「痛てててて」

「相当悪くなってますね」

まるで本物のマッサージを気取っている。

「何処が？」

「彼女を甘やかす心が曇ってます」

僕が手を掴もつとするのをすりぬけて、伸びをする。

「朝ごはん食べに行こう」

僕たちは手を繋ぎ、駅に向かって歩いた。急勾配が息をあげる。

彼女は平気な顔をしているが、一步踏み出すたびに繋いでいる手に力が入っている。

「ちょっと休憩しよう」

坂の途中の自販機で立ち止まり、缶コーヒーを買う。ちょっと意地悪な気分になって、開けないで渡す。

「……開けてください」

「自分でチャレンジしてみろよ」

「やだ。爪が折れちゃう」

僕は彼女に缶を持たせたまま、クルトップを開けてやる。

「ありがとう」

缶コーヒーを持つ、彼女の手は確かに美しい。だけど、手にかかる分の手間と優しさを、もうちょっと僕に回してくれてもいいんじゃないの？

「なんでそんなに手フェチなの？」

「手フェチって……手と首には年齢がでるっていうから」

ゴクゴクと飲み干し、缶をごみ箱に捨てる。

「それに」

「それに？」

「いくつになっても繋いで歩いてもらえる手でいたいから」

さらっと言っただけで歩き出す彼女の手は、忌まわしい過去を持つ僕の左手の中にある。

「じゃあ僕はいつまでも君の手が美しいままいられるように、苦勞をかけないように頑張るよ」……とは恥ずかしくて言えず、柔らかい彼女の手をぎゅっと握って

「腹減った、何食べたい？」と聞いた。

僕たちがヒイヒイいって昇っている横を、男子中学生が豪快な立ちこぎ自転車で風を切って行った。

爪を磨く

九月に入っても暑い事を、私ほど憎んでいる人間も、そうはいないだろう。

左手で汗を拭きながら、太陽を睨む。長袖のシャツの中で、腕に汗が伝っている。右手の半分まではめたサポーターの臭いを嗅いでみる。

汗くさい。

「病院では取り替えよう……」

やっと古ぼけた小さな病院にたどり着き、裏口の鍵を開けて中に入った。

誰もいない、内科の古い廊下は木で出来ていて、歩きたびに軋む気持ち悪い……とは思わない。ここは私の両親がやっている病院だからだ。私はここで、受け付けや事務をやっている。

まだ八時を回っていないが、入口の鍵を開ける。常連のお年寄りが挨拶をする。私も笑顔を作り対応する。両親が七十を越えているせいか、お年寄りがたむろする。診察がなくても一時間二時間話しかんでいるが、両親も何もいわない。

私は両親が歳をいつてからの子、というわけではない。いわゆるもらわれっこ、養子だ。

私は本当の親に虐待を受け、棄てられて施設にいた。二歳の頃には施設にいたから、本当の両親の記憶も虐待されていた記憶もあまりない。

ここの子になっただけから、ずっと無口なままだ。病院にきたのだから、医者になろうと勉強してみたが、到底頭がついて行かなかった。だから事務をやっている。両親には申し訳なく思っている。

相変わらず、お年寄りで混雑している受け付に、見慣れない人が入ってきた。

「うわあ、めっちゃこんどるやないか」

入るなりその男はそう言った。

アロハシャツに白いパンツ。恰幅がよく、六十歳くらいでほとんど坊主の頭は額が頭皮に浸出を初めている。左手をポケットに突っ込んだまま、受け付まで来て保険証を出した。

「こんにちは、初診ですね」

「そや」

「こちらの問診票にご記入ください」

「よしや」

男は右手で問診票を引き寄せるとそのまま右手で記入を始めた。

左手はポケットに突っ込んだまま。

さらさらとしたまで書き終わるとペンを置き、聞いた。

「よう繁盛しとるけど、時間かかるんかね？」

「いいえ。十五分ほどお待ち下さい」

「さよか」

そういうと男は開いている席にどかりと座り、テレビの画面に見入っていた。

「どうぞ」男は名前を呼ばれると、勢いよく立ち上がり、診察室へ消えて行った。

三十分後。

男はでてきて、会計をした。

「お薬はこの処方箋を持って、向かいの薬局でもらって下さい。血液検査の結果は来週です。また火曜日にいらして下さい……」

診察代を告げると、右手でポケットから生のお札を出して置いた。お釣りを受け取りながら、

「ねえちゃん、こんな天気の日には長袖着とって暑くないんか？」と聞いた。

待合室が一瞬しんとなる。私は曖昧に笑った。

「美白もええけど、少しはお日さんにあたらんと、病気になるぞ。

ほな、また来週。お世話様、おおきに」男は笑って出て行った。

私は一年中長袖を着ている。

右手の肘から、手の甲半ばにかけて大きなやけどの痕がある。本当の両親と繋がる虐待の記録だ。

学校に通っている頃も体育の時間も制服も、長袖で出来るよう両親が学校に話をつけてくれた。それはそれで色んな目で見られる。プールだけは隠す事が出来ない。なるべく理由をつけて休んだが、夏は本当に苦痛だった。

ひっそりとしていること。それが唯一、自分を守る手段だった。

一週間後、あの男はやって来た。この前と同じように、

「ひゃあ、今日も大繁盛やなあ」

といいながら診察券を出して、どかりと空いた席に座る。今日は朝からばたばたして、常連のおばあちゃんが男に話し掛けていることには気付かなかった。

三十分後、男は神妙な顔をして受け付に立った。肝疾患。うちでは扱えない。多分、紹介先の病院で即、入院になるだろう。

「今日は何時までやっとするんですか」

「六時までですけど……」

「そうですか」

男は領収書を受け取り、出て行った。バタバタしたまま六時を回り、入口の鍵を閉めたのは七時近かった。

カーテンをかけて、事務所に戻ろうとすると、ガラス扉を叩く音がする。

「急患？」

カーテンを開けると、あの男が汗だくになりながら、ドアを叩いていた。

「どうしました？」

男は息を切らしながら長細い包みを差し出した。

「これをもろうて下さい」

「え？」

「開けて見て」

中には硝子の爪磨きが入っていた。初診の時、男が着ていたア口八のような鮮やかな布が挟んであり、裝飾されている。

「わし、ごめんなさい。やけどの事、今日来てはったおばあちゃんに聞きました。知らんかったとは言え、ごめんなさい」

「……いえ、いいんです」

「よくないんです。見て下さい」

そう言っただけで差し出した男の左手には、小指と薬指の第一関節から先がなかった。

「働き出してすぐ、機械に挟まれて落としました」

右手と比べて色が白く、肉付きが悪い。

「若かったから、色々言われてくれたりもしました。せやけどわし、こんなんやから立ち直ったふりして……お嬢さんは同じにされるの嫌かも知れませんが、似たような傷持つてるのんに、ほんまにすんません」

私は黙って男の右手を見つめた。

「偉そうな事、なんも言えませんが。立ち直ったふりしてもずっとポケットに突っ込んだままで……こんなになまっ白い。結婚もしてへんし、家族ももうおらんから、入院言われたら逃げよ、と思っとなんかたくらい軟弱なんですわ」

やけどの痕がきゅっと引き攣る。半分の年齢の私を前に、男は頭をかきかき、言葉を絞り出すように話している。

「わしも……僕も頑張りますから、お嬢さんも頑張ってください」

それだけいうとくるりと背を向けて歩き出した。

私は爪磨きをきゅっと握った。もの心ついてから、ひっそりとする事だけを目標にしてきた爪は、短く切り揃えるだけで一度も磨いた事などない。

はっとして、外に出た。男の背中は大分遠い。

「入院、ちゃんとして下さいね。確かめに行きますから、ちゃんと、

してくださいね」

男は立ち止まり、左手を大きく振って見せて、そのまま振り向く事なく、角を曲がっていった。

生まれて初めて、大きな声をだした私は心臓をどきどきさせながら、もう誰もいない道をしばらく見つめていた。

不器用な手

「痛っ」

お昼ご飯のラーメンにのせようと、白髪葱を作っていたら、包丁の先で指を突いてしまった。

うつすらと滲んだ血は荒れた皮膚の木目に沿って流れていく。

唇を近付け、血を止めようとする。口の中に鉄分くさい味が広がる。と、同時にささくれに唾液が触れてしみる。

「ちっ……」

舌打ちをして再び指を眺める。

包丁をひっかけるなんて、不器用な私にすれば日常茶飯事だ。なのに今日は特別いらいらする。理由はわかつている。

旦那の様子がおかしい。

多分

「浮気……」 咳くように口にしてしまうと、怒りがこみあげてくる。結婚して十年。子供にも恵まれた。浮気かも、と疑う事もなかったわけじゃない。だがなんとか円満にやってきた。

しかし、今回は違う。
最近、やたら携帯ばかりみている。しかも昨日、決定的な事があった。

「うん…… 嫁さんには内緒だからさ、ごめんね、迷惑かけて……」
トイレにまで携帯を持ち込んでこそこそ話していた。

ドア越したから、少しは聞き違いがあるかも知れない。でも嫁さんには内緒だ」は、はっきりと聞こえた。

小学生の娘は今日、母のところに行く。母はここより娘の学校の近くに住んでいて、時々、娘を泊まらせて、私に休日を作ってくれる。

「連休だし、たまには夫婦水入らずで過ごさなさい」
いつもは感謝するが、今は母の言葉も腹立たしい。

私たちは職場で出会い、恋愛結婚だったはずだ。私は実家から会社に通っていて、金銭的には自由な方だった。

お小遣の大半は美容に費やした。顔も手もいつもつるつるで、流行を取り入れたファッションをしていた。

旦那は元々口数が多い方ではない。

それでも付き合っている頃は、重い口でも褒めてくれたものだ。

「いつも清潔感のある服装だよな」

「肌が綺麗だね」

「とても優しい手をしてるよね」

口数が少ないだけに、たまに言う、そういう言葉がひどく心に響いた。

結婚後もあんまり得意ではない私の料理に文句も言わず、家事は手伝ってはくれなかったけれど、仕事の愚痴を家に持ち込む事もせず、日々過ごして来た。

娘を授かってからは、疲れて実家に頼る事が多くなって

「行っておいで」と送りだしてくれた。もちろん娘の事は愛してくれている。

私たちは上手くいっていたはずだ。

「どうして……」

OL時代とは似ても似つかない荒れた手を見つめて呟いた。ささくれ、ひび割れ、絆創膏。すべてが積み重なった私たちの記録だったはずなのに……

ぼんやりとしたまま、気がつくと夕方になっていた。電話が鳴る。

「駅前まで出て来ないか？」緊張した旦那の声。

「雨、降ってきた？」

「いや……話があるから。歩いてこいよ」

電話を切ってから、しばらくぼんやりしていた。

「話がある」

そんなに唐突に。私の意見は聞いてもらえないのか。

今までの日々がぐるぐる回る頭で、結局食べなかったラーメンを

流しに捨てる。鏡の前に立ち、髪を整えてスニーカーを履き、家を出た。

駅までの道程は何も覚えていない。ただ悲しくて、腹が立って、熱くて痛い、喉の奥にぐつと力を入れていた。

旦那は、駅前で家とは反対方向を向いて立っていた。

ジャケットの裾が折れてしまつて、不自然に曲がっている。少し猫背気味の肩の上にちょこんとのっかる頭は薄くはなっていないけれど、大分白くなっている。

私は緊張したままかすれる声で、なるべく明るく振る舞った。

「ごめんね、待たせて」

旦那は振り返ると、おどおどしたように、

「おう」と言つて私を上から下まで見定め、スニーカーに視線を止めた。

「……飯、食つていこう」「ぽつりというと、くるりと振り返り歩きだした。

私は旦那の後ろを歩く。

ジャケットから覗く手は、パソコンに向き合つてばかりいるせいか、骨つぽくはあるが、柔らかさそうだ。

その手で、一体どんな女を……

入り慣れないレストランのテーブルに着いた時には、私はもう叫びだしそうになっていた。

「具合でも悪いのか……」

膝の上に置いた手をぎゅっと握り、見つめていた。親指のささくれが乾燥して肌ではないようにさえ思える。

「話つて何？」

震える声を押さえ、聞いた。

「ああ……まあ、飯食つてからでも」

テーブルの上に組んで置いた旦那の手。親指の先を擦り合わせるように世話しなく動く。

「先に……」

「ああ……」

沈黙の間も動く親指にいららす。ささくれはなく爪も健康的につるつるしている。それがさらにいららすせる。

「はあ……」

深いため息。ため息つきたいのは、こっちのほうなのに。意を決したように旦那は鞆を開け、何か封筒を取り出した。私の目の前に押しやる。

「開けて」

シンプルだけど、しっかりとした白い封筒。浅黒くくすんだ私の指は震えていた。旦那の指も組んだまま、震えている。決定的な瞬間なのか……

「へ？」

中から出て来たのはエステティックサロンのチケットだった。私の名前が入っている。

「来月、結婚記念日だから」

「……」

「あの、ほら、指輪も予約してあるんだけど、なんかお前の手、いつも絆創膏があるし。それならついでに本人も綺麗になればいいかと……」

全身から力が抜けていく。

「嫁さんに内緒……」

「あ、聞こえてたんだ……そういうところって、男子禁制なんだよな。知らなかったよ」

テーブルの上の手は相変わらず細かく動いている。慣れない事をしたせいかわ、うつすら赤く染まっている。

そうだった。プロポーズされた時もあの手は同じようにしていた。(手を握ってくれたらいいのに)

不器用な人だと思ったものだ。

私は手を伸ばし、細かく動くその手を止めた。

「お腹すいちゃった」

「そつだな」

旦那は片手をあげて店員を呼んだ。

帰りは手を繋いで帰ろう。この人には何をプレゼントしようか。ささくれの指に伝わる温度を感じながら、そう考えていた。

遠い手

少し前を歩く彼の、歩様に合わせて揺れる手を見ていた。相変わらず、がっしりとしていて大きい。爪は綺麗に切り揃えられて、心なしか磨かれているようにも見える。

初めて彼の手の大きさを実感したのは中学二年生の時。音楽会で、ピアノを弾く手を見た時だ。

それまではイメージ的に、ピアノを弾く手はほっそりとしているものだと思っていた。

「すごく手が大きいんだね。それに、しっかりしてる」
彼は笑いながら、

「ピアノの鍵盤って重いんだよ。お前の手じゃあ……エレクトーンのほうがいいな」

私の手を見ていった。

ただでさえ二十センチ以上私より背の高かった彼の手は、なんでも掴めそうに思えた。

それも十五年以上前の事。

再会は偶然。元同僚と行った地下にある、ちよつと大人っぽいバーで彼がピアノを弾いていた。

すぐに彼だとはわかったが、様子はずいぶんかわっていた。

ひよる長い体からは肉がそげ、もやしみたいだったのが、貝割れ大根みたいになっていた。ピアノの前に座っただけでもあの頃のうれしそう、楽しそうな表情ではなく、どこか哀愁が漂っていて、バーの雰囲気溶け込んでしまっていた。

話し掛けると覚えていてくれたみたいで、仕事のない日に飲みに行こう、となった。

で、今日にいたる。

「今、何してるの？」

「美容師だよ」

「へえ……えらいね」

まっすぐ見つめる目にときどきしながら、私はガサガサの手をテーブルの下に隠した。

実は別に全然偉くない。

実家が美容院だから、美容師になった。学校を出て五年は、修業ということで勤めに出て、その後実家で働いている。

おかげで出会いは一切なく、かといってなんだか焦る事もなく、のほほんと毎日暮らしている。

「結婚とか、してないの？」

「俺？してたよ」

大きな手がジョッキを湯飲みのように見せる。

「へえ……なんか意外だね」

「意外？」

「うん、添い遂げそう」

「添い遂げるって……なんか、古風だね」あんまりまっすぐ見つめる目と大きな手に、続きを聞く事ができなかった。

……今は一人なの？

「じゃあ」

「あ、うん」

開いたタクシーのドアの前で、彼は振り返った。そして笑いながら、大きな手で私の頭を掴むと、くしゃくしゃと髪を撫で、

「また休みが合ったら飲もうぜ」といった。

私はひとしきり騒いで、タクシーに乗り込み、見送ってくれる彼が見えなくなるまで振り向いていた。

「はあ……」

リビングでねっころがり、自分の手を蛍光灯にかざして眺めていた。

シャンプーや洗剤で荒れている。クリームやパックやいろいろ試してはみたが、頑固なまでにガサガサだ。柔らかい爪は、あまりに

も薄くて磨く事もできない。

「何ため息ついてるの？」母がエプロンで手を拭きながらやってくる。

「お母さん、手、見せて」

「ほい」

目の前に突き出された手は、歳をとって、しわがあるが、柔らかく手荒れしていない。

「なんでさあ、おんなじ仕事してるのにこつも違うの？」

「あんたの手はお父さんにそっくりだからねえ。ねえ、お父さん」
母は壁にかかった遺影に話かける。

(そこが似てるんですか……)

小学生の時に他界してしまった父の手を思い出せない。結構遊んでもらったはずなのに……

「ん……？」

何か大切な事を思い出せそうだったのに、インターホンが鳴って飛んで行ってしまった。

彼と会えたのは二週間後で、だいぶ秋らしい涼しい風が吹いていた。彼の勤めるバーの近くで飲んだ。

「秋らしくなつて来たよね」

「ん？ああ……俺は寒いのが苦手だなあ。秋も好きじゃない」

「なんだか、元気ない。私はなるべく明るく言ってみる。」

「でも、芸術の秋っていうじゃない。いいなあ、ピアノリストは」

「ふっ……俺レベルじゃあ、芸術なんて追究できないよ。食べる事のほうが優先」

「うっ。」

励まそうと思ったのに、失敗した。

「季節はいつが好きなの？」

「私は冬」

「なんで？」

「さあ……なんでだったかなあ」

「きつぱり言い切ったわりに理由ないの？」

「うっ」

何かを思い出しそうだったのに、思い出せなかった。

「まあ、それだけ裸でもお洋服着てたら寒くないよな……」

「裸でも……？」

「お肉……」

私は騒ぎながら文句を言った。本当はあんまり腹がたつてはいなかった。彼が笑うと、うれしかった。

タクシー乗り場に向かう途中、彼はぽつりと聞いた。

「中二の時のさあ、音楽会の前に、俺に大きな手だつて言ったの、覚えてる？」

「うん。ピアノよりエレクトーン向きだつて言われた」

「その後、俺に言った事、覚えてる？」

「覚えて……ない、かな。ごめん」

「あはは。謝らなくていいよ」

「なんて言った？」

「好きです、付き合ってください」

「嘘っ?!」

「……ってほど深刻な事じゃないから」

はぐらかされて、タクシーに乗せられる。

彼はこの間と同じように、いつまでも手を振っていた。貝割れ大根が揺れているようだったし、口元が、

「バイバイ、ありがとう」と動いた気がしたけれど、元気になったみたいなので安心した。

「今年は灯油が高そうだ」

母が新聞を遠ざけて読みながら、ぽつりと言った。

「冬……手荒れがひどくなるけど好きなんだよね」

私もぽつりと呟くと、母は懐かしそうに笑った。

「全く同じ台詞をお父さんも言ってたわ」

「へえ……お父さんはなんで冬が好きだったのかな」

「あんたと手が繋げるから」

「え？」

「手荒れを気にしないであんたと手が……」

思い出した。

見るからに引つ掛かりそうな程に荒れた手。

小さな頃、父はあまり手を繋いでくれなかった。だが、冬の間だけは、手を繋いで歩いた。手袋越の大きな手。

子供心にわかっていた。あのあかぎれやひび割れは、仕事をして
いる勲章なんだ。

「お父さんはどうしておててが大きいの？」

「それはお前やお母さんの幸せを掴むためだよ」

安心だ。

お父さんの手は、とっても大きい。私たちはずっと幸せでいら
れる……

「ああっ!!」

母の回想話をそっちのけで、大声を出した。

「びつくりするでしょう！」

「思い出した、思い出した」

私は慌てて彼に電話するが、電波が届かない。

「いかなきゃ。ちょっと出かけてくる」

「明日も店があるんだから、早く帰ってきなさいよ……」

追いかけてくる母の言葉に生返事で、私は彼の仕事場へ向かった。
地下への階段を下りていく。

店に入ってもピアノの音がしない。少し嫌な予感がする。

「ああ、辞めましたよ」

「……」

カウンターに力なく座り、お酒を頼んだ。

ほんの十日程前に会ったのに。でもあの時、

「バイバイ」って口が動いた気がした。

思い出した。中学二年生の私は彼に言った。

「それだけ手が大きいと、たくさんの人の分の幸せを掴んであげられそうだね」

父に言われた言葉だと説明した時、彼は関心したように、

「へえ……」といいながら自分の手を、見つめていた。少し笑って、誇らしげに。

グラスを握りしめた手に、水滴が滲みて痛かったけど、そのままにしていた。

もし、あの日に答えられていたら、思い出していたら、彼は今もここにいたのだろうか。彼にとっては、どちらが正解だったのだろうか。

答のない疑問は心の奥に生まれて、日常に埋もれていく。

彼がどこに行ったのかもつきとめないまま、季節だけが流れて行った。

「なんか外国から小包来てるよ」

仕事が終わって、ヘアカラーの着いたゴム手袋を洗っていると、母が包みを眺めながら言った。

「開けてみて」

「お母さん開けていいの？」

「うん、今手離せないから」

かさかさと紙袋をひらく音。続いて母の歓声。

「まあなんて綺麗な……」

手を拭きながら見にいくと、テーブルに置かれた美しいレースの手袋が目に入った。

同封された一枚の写真。

大きな手を振っている、貝割れ大根のような彼と一台のオンボロのピアノ。それを囲むよく日焼けした掘りの深い子供たちも、みんなこちらに手を振っている。

裏にはメッセージ。

『こちらには冬はありませんが、素敵な手袋をみつけたので送りま
す』

続きを読み進めて、ちょっと涙が出そうになって、奥歯を食いし
ばった変な顔を、

「あんた、なんて顔してんのよ」とからかわれた。

「うるさいなあ」

「ね、あの手袋、お母さんに……」

「あげません。さ、早くタオル干しちゃってよ。私も奥、片付けち
やうから」

こっそりポケットに写真をしまった。

メッセージはこう続く。

『僕はここで、子供たちの幸せを掴む。君の小さな手が僕の背中を
押してくれた』

お父さん譲りの私の手は、今日も頑固にガサガサしていた。

祈る手

私たちは自由だった。

私の人生の中で、そして彼女の人生の中でも、あれほど自由な時間はない、永遠にこないであろう。

新しい街。友達もいない。家と職場の往復。

私たちはまるで、逃亡者のようだった。何から逃げているのかわからない。たった二十二歳とたった二歳のギャングだった。

仕事以外の時間は、本当に自由だった。

好きな時間に眠り、好きな時間に起きた。好きな物を食べ、好きな物を飲んだ。たまに洗濯や掃除をする。買い物もする。時々外食をして、時々出前もとった。ほとんどの時間を二人きりで過ごした。怖い思いもした。

タクシーから降りしてもらえなかったり、ちよつと強引な押し売りが来たり、後をつけられたりした事もあった。

でも私は勇敢だった。

どんなことにも屈することはなかった。声も手も、心までも震えていた。それでも私は、私たちは勇敢だった。

私たちは、アパートの部屋という小さな世界でたった二人、よく笑い、よくしゃべり、よく泣いた。彼女の世界の中心には私がいて、私の世界の真ん中に彼女がいた。

しかし、そんな幸せは、そう長くは続かない。

やがて私にも友達ができ、彼女にも新しい世界が開ける時がやってきた。

私たちは時間に支配されるようになっていった。一緒に過ごす時間は減り続ける。彼女の話には、私の知らない名前が飛び交う。私の知らない涙、知らない悩み、知らないときめき。世界の中心は確実にずれていく。

親が子を殺す、酷い話を聞いては胸を痛める。

小さかったその手が、どんどん私の手の大きさに近づくように、彼女の欲しがるモノが、どんどん現実的になって行く。

一向によくなりそうのない世の中に、取り残されたようなあの頃の勇敢で優しい気持ち、どんどん不安を募らせる。私の欲しがるモノがどんどん抽象的になっていく。

私たちは自由だった。

それは儂いもので、そしていつかは壊れゆくもの。

もしも壊れない自由を、この手に入れたなら、私たちは次に何を欲しがるのだろう。

私は祈り続ける。

せめて彼女を導く手が、優しいものでありますように。かつて私がいいつも繋いでいた手を、温め続けてくれますように。

私たちは自由だった……

祈る手（後書き）

ほのぼのとした雰囲気でもとめたかったのですが、上手く伝わったでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7466c/>

その手を愛す

2010年10月8日15時59分発行